

第 1 編 総 則

第 1 章 計画の目的

【防災危機管理局】

この計画は、災害対策基本法（昭和36年法律第223号）第42条の規定に基づき、佐世保市の地域にかかる災害対策に関し、次の事項を定め、災害の未然防止、災害の軽減及び災害復興のための諸施策を明らかにし、これを総合的かつ計画的に推進することによって、本市防災体制の確立を図り、市民福祉の増進と市勢の発展を期することを目的とする。

また、各施策を推進する上では、乳幼児や障がい者、高齢者等の要配慮者の立場に立ち、男女共同参画の視点を取り入れた防災対策を確立する。

- 1 本市の地域にかかる防災に関し、本市の区域内の公共的団体その他防災上重要な施設の管理者の処理すべき事務又は業務の大綱
- 2 防災施設の新設又は改良、防災のための調査研究、教育及び訓練その他の災害予防計画
- 3 災害に関する情報の収集及び伝達、避難、消火、水防、救難、救助、衛生その他の災害応急対策の計画
- 4 災害復旧に関する計画
- 5 災害に関する各種の措置に要する労務、施設、設備、物資、資金等の整備、備蓄、調達、配分、輸送、通信等に関する計画
- 6 その他必要な計画

第2章 本市の概況

地域の防災対策を図るにあたっては、本市の特質を把握し、災害環境を知ることが必要である。過去の災害履歴や本市の地形や社会的状況等を踏まえて、本市の災害環境をまず正しく認識する必要がある。

地形・地質・気象等の自然条件と人口、交通などの社会的条件について述べる。

第1節 自然条件

第2節 社会条件

第1節 自然条件

【長崎地方気象台・防災危機管理局】

1 地勢

本市は、平坦地に乏しく、いたるところに山岳丘陵が起伏し、北は国見山脈から岐れた石盛山脈が連なり、東は国見山を主峯とする八天岳、隠居岳などからなる国見山脈がそびえ、西には将冠岳、弓張岳などの山脈があつて佐世保と相浦とを分断し、南は深く入り込んだ佐世保湾によって海に接している。

一方海岸線は、極めて出入りが多く典型的なリアス式海岸で、点在する島の数は208に及び、全国でも類を見ない特色ある形状を示している。

次に本市及びその付近の地形を形づくる地質構造は、極めて複雑であるが、大別して火成と水成の両岩類に区分され、水成岩は殆んどが砂岩と泥板岩でしめている。このほか早岐、日宇、相浦の一部に沖積層地帯（河川の流域）があり、黒島の斑糲岩、東の浦、金山、高島の石英粗面岩などわずかに見受けられる。

本市の地形の基盤をなす水成岩は、主として、第三紀古層に属する黄褐色の砂岩及びその間に挟まれた灰色の泥板岩からなり、その間に薄い炭層を含んだ所があるが傾斜は概してゆるやかである。

玄武岩は、黒色を帯び、淡褐色の橄欖石、無色ないし淡褐色の輝石、斜長石の巨晶及び磁鉄鉱からなっており、北側の松原、牟田、田代、山の田附近の一部と将冠岳の西麓、弓張岳の中腹に見受けられ、国見山脈の最も急峻な地帯から西南に向つて次第に緩傾斜を作りながら相浦沿岸の沖積層の下に没している。

内陸直下型地震の要因となる活断層の分布については、第三紀層を切る断層は多数あるが、第四紀に活動したことが確実なものはない。しかし、活断層が確認されていないM6クラスの地震はいつ・どこで発生してもおかしくないと考えられている。

2 気象

(1) 気候

佐世保市は年平均気温が17.2℃、年降水量が1989.0mmであり、我が国のなかでは比較的温暖・多雨の傾向を持つ。（第1表）

温暖・多雨傾向の要因は、佐世保市が南側から西側にかけて海に面しており、近海を流れる対馬海流の影響を受けていることが考えられる。

第1表 平均気温、相対湿度、日照時間、降水量の平年値

(佐世保特別地域気象観測所)

要素	月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
気温	平均(℃)	7.0	7.8	11.0	15.3	19.7	23.0	26.8	28.0	24.8	20.0	14.4	9.2	17.2
相対湿度	平均(%)	63	62	63	66	70	78	79	76	71	65	66	62	68
日照時間	合計(h)	111.5	128.2	167.2	183.2	197.2	128.2	165.6	209.0	177.6	188.6	142.1	122.0	1922.9
降水量	合計(mm)	63.4	81.1	120.7	152.9	171.1	328.9	342.2	255.4	195.6	98.6	101.6	77.5	1989.0

統計期間：1991～2020年

(2) 災害に関する気象

ア 強風

災害を起こすような強風の原因には台風・低気圧・季節風・前線・竜巻・雷雨等の気象じょう乱や地形効果が加わって起こる局地風がある。佐世保市では、最大風速が10m/s以上の風は冬期の季節風、春秋の低気圧、台風等により、年間28.5日発生している。

また、最大風速が15m/s以上の強い風や20m/s以上の暴風は、台風の接近や強い冬型の気圧配置で発生することが多い(第2・3表)。

なお、風については次の事項に注意が必要である。

- (ア) 気象庁が用いる「最大風速」とは「10分間平均風速の最大値」である。
- (イ) 風速は地形や廻りの建物などに影響されることや、風の吹き方は絶えず強弱の変動があり、瞬間風速は平均風速の1.5倍から3倍以上になることがある。
- (ウ) 風速が2倍、3倍になると、風圧は4倍、9倍と大きくなる。

この他、長崎地方気象台では、積乱雲の下で発生する竜巻、ダウンバースト等による激しい突風に対して注意を呼びかける気象情報で、雷注意報を補足する情報として竜巻注意情報を発表している。

第2表 日最大風速階級別日数

(佐世保特別地域気象観測所)

階級日数>月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
30.0m/s 以上	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
20.0m/s 以上	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.3
15.0m/s 以上	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1	0.2	0.5	0.2	0.0	0.1	1.4
10.0m/s 以上	2.7	2.4	3.9	3.5	1.4	1.6	2.3	2.1	2.3	1.9	1.4	3.1	28.5

統計期間：1991～2020年

第3表 日最大風速及び日最大瞬間風速 第1位～第5位の記録

(佐世保特別地域気象観測所)

	順位	風速 (m/s)	風向 (16方位)	年月日	原因
日最大風速 統計期間 (1946/11～2023/12)	1位	29.8	北	1951.10.14	台風第15号(ルース台風)
	2位	29.2	北	1951.10.15	台風第15号(ルース台風)
	3位	26.3	南南東	2020.9.7	台風第10号
	4位	26.1	北	1950.9.13	台風第29号
	5位	25.7	北	1949.6.21	台風第2号(デラ台風)
	順位	風速 (m/s)	風向 (16方位)	年月日	原因
日最大瞬間風速 統計期間 (1951/3～2023/12)	1位	49.3	北	2004.10.20	台風第23号
	2位	43.5	北東	2006.9.17	台風第13号
	3位	42.1	西	1991.9.27	台風第19号
	4位	41.6	東南東	2020.9.7	台風第10号
	5位	41.4	北北西	2004.8.30	台風第16号

イ 台風

(ア) 統計

熱帯の海上で発生する低気圧を「熱帯低気圧」と呼ぶが、このうち北西太平洋（赤道より北で東経180度より西の領域）または南シナ海に存在し、なおかつ低気圧域内の最大風速（10分間平均）がおおよそ17m/s（34ノット、風力8）以上のものを「台風」と呼ぶ。台風は、1991～2020年の平年値によると、年間25.1個発生し、月別の発生数は8月が5.7個と最も多い。また、日本への年間の接近数は11.7個、上陸数は3.0個である。このうち九州北部地方（山口県を含む）に接近する台風は、年間3.8個である。

(参考)

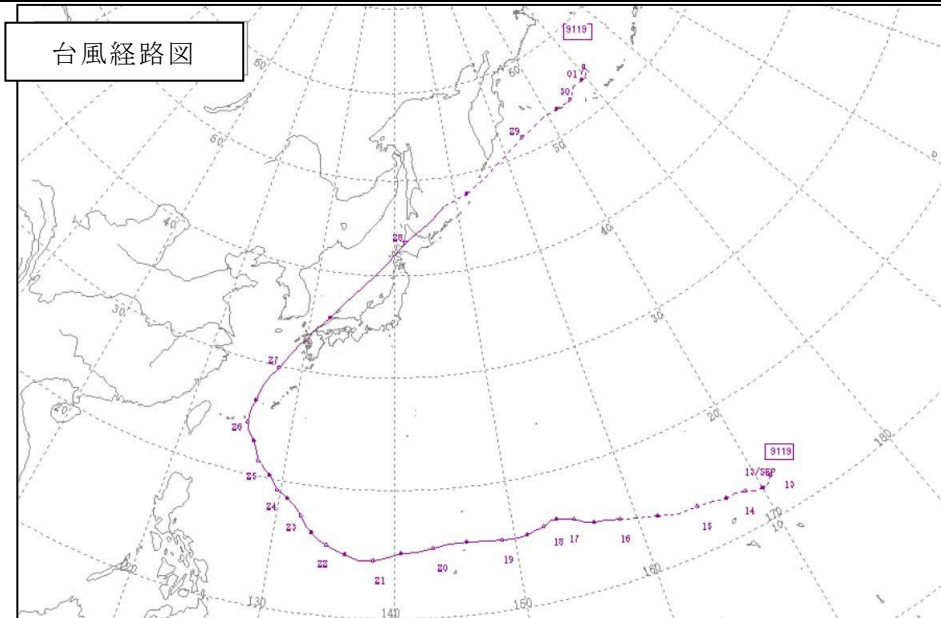
※台風の上陸とは台風の中心が北海道・本州・四国・九州の海岸線に達した場合をいう。ただし、台風が小さい島や半島を横切って短時間で再び海に出る場合は通過という。

※台風が日本への接近とは、台風の中心が国内のいずれかの気象官署から半径300km以内の域内に入ることをいう。なお、九州北部地方に接近という場合は、台風の中心が九州北部地方(山口県を含む)のいずれかの気象官署から半径300km以内の域内に入ることをいう。

(イ) 主な台風記録（佐世保特別地域気象観測所）

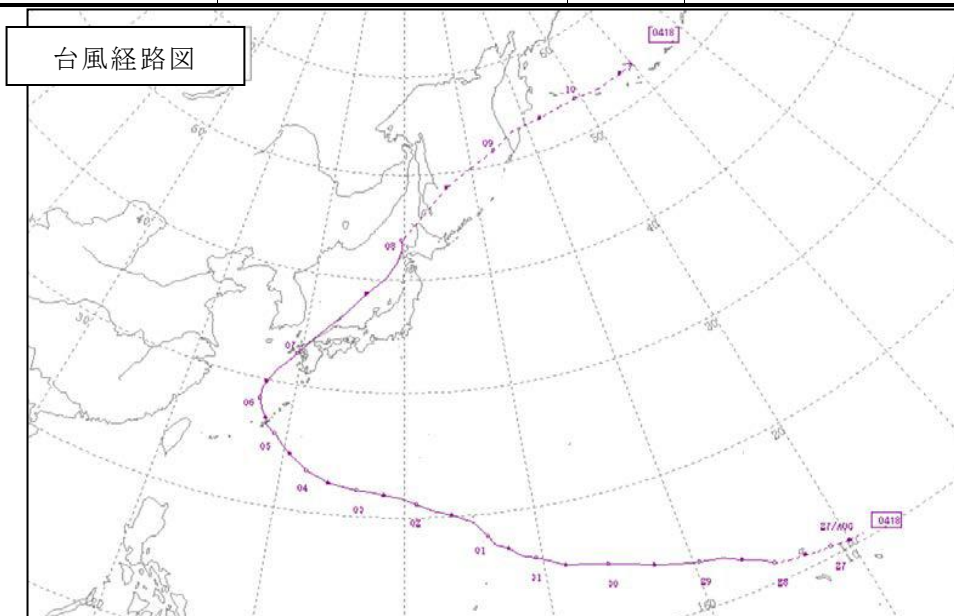
a 1991年（平成3年）台風第19号

上陸日時	平成3年9月27日16時過ぎ			上陸場所	長崎県佐世保市の南
最低海面気圧	941.1hPa（第1位）			起時	16時26分
最大風速	17.6m/s	風向	東北東	起時	15時40分
最大瞬間風速	42.1m/s	風向	西	起時	17時20分
総降水量	113.0mm	起時	26日18時00分～28日02時30分		



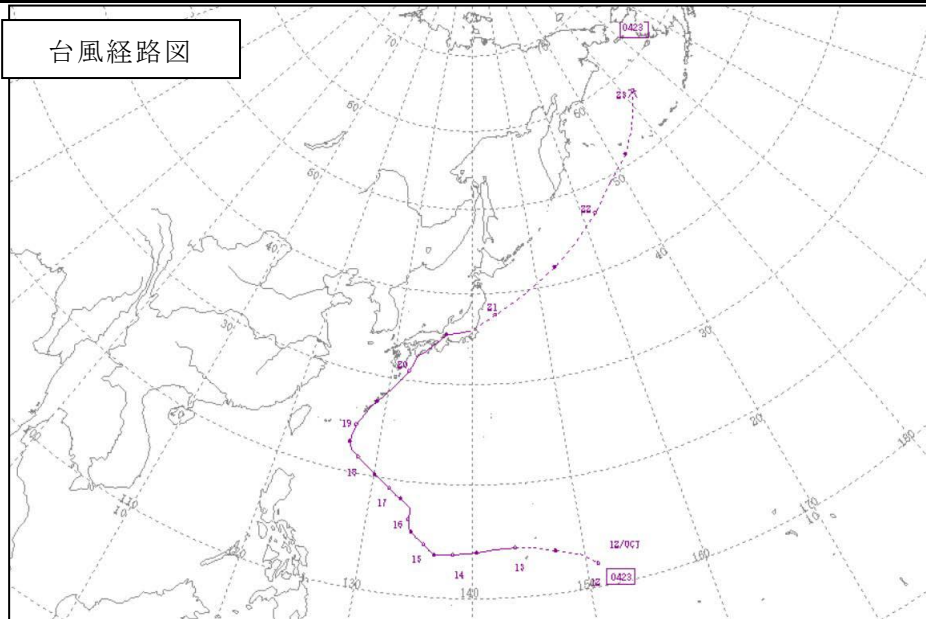
b 2004年（平成16年）台風第18号

上陸日時	平成16年9月7日9時半頃			上陸場所	長崎県長崎市付近
最低海面気圧	952.7hPa（第2位）			起時	09時53分
最大風速	23.7m/s	風向	西	起時	12時40分
最大瞬間風速	37.0m/s	風向	西北西	起時	12時37分
総降水量	71.0mm	起時	9月7日		



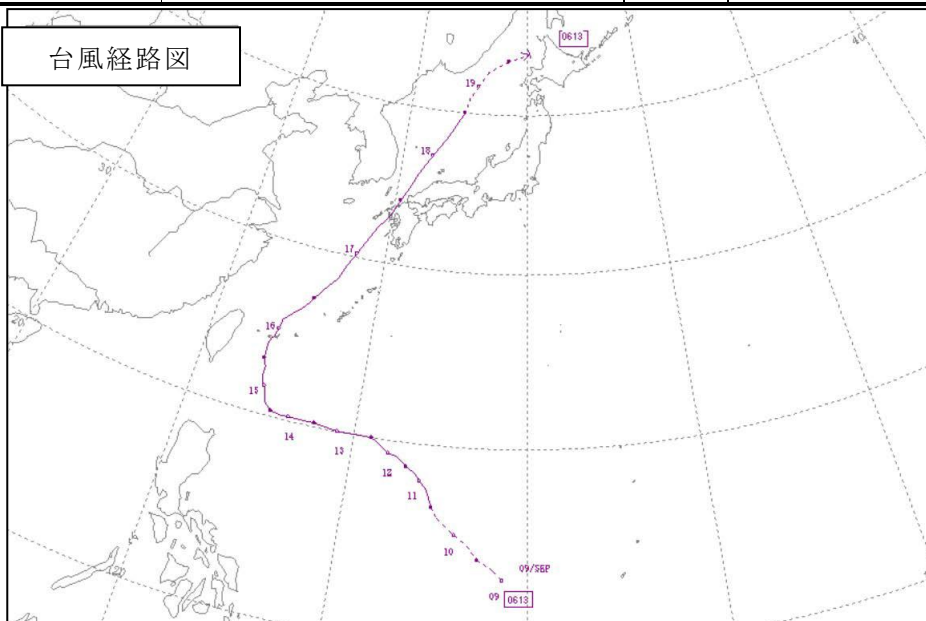
c 2004年（平成16年）台風第23号

上陸日時	平成16年10月20日13時頃			上陸場所	高知県土佐清水市付近
最低海面気圧	989.7hPa			起時	10時57分
最大風速	22.8m/s	風向	北北東	起時	11時40分
最大瞬間風速	49.3m/s（第1位）	風向	北	起時	10時57分
総降水量	106.5mm	起時	10月19日～10月20日（2日間）		



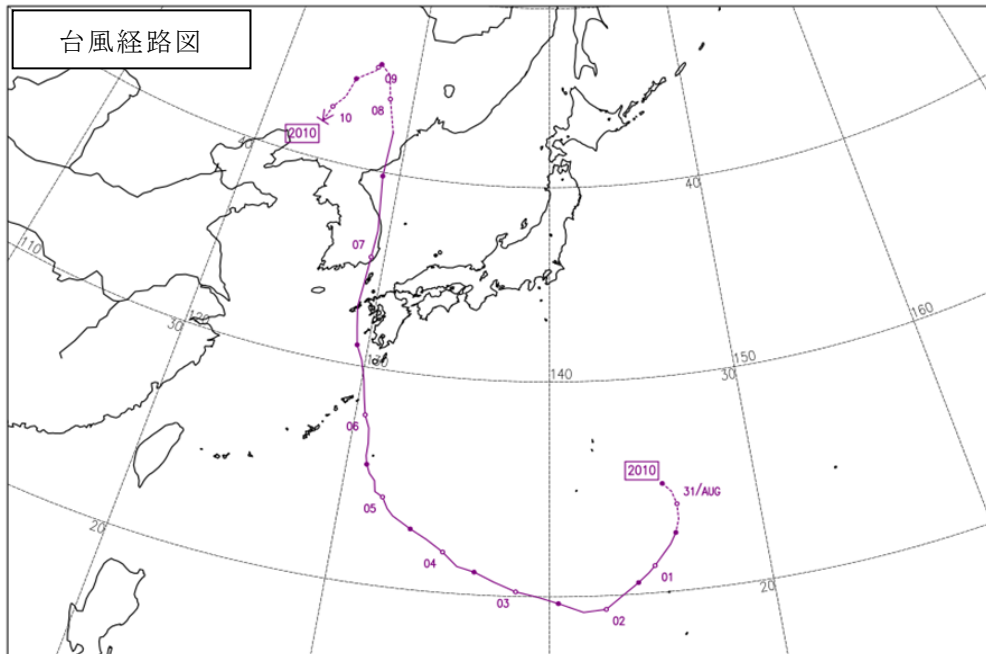
d 2006年（平成18年）台風第13号

上陸日時	平成18年9月17日18時頃			上陸場所	長崎県佐世保市付近
最低海面気圧	955.0hPa（第3位）			起時	18時24分
最大風速	22.0m/s	風向	北東	起時	17時30分
最大瞬間風速	43.5m/s（第2位）	風向	北東	起時	17時26分
総降水量	65.5mm	起時	9月17日		



e 2020年（令和2年）台風第10号

上陸日時	-			上陸場所	
最低海面気圧	965.9hPa（第5位）			起時	3時21分
最大風速	26.3m/s（第3位）	風向	南南東	起時	4時18分
最大瞬間風速	41.6m/s（第4位）	風向	東南東	起時	3時23分
総降水量	36.0mm			起時	9月6日～9月7日（2日間）



(ウ) 台風の特性

台風が接近するとき、暴風、大雨、高潮、高波などによる甚大な災害が発生することがある。しかし、台風がもたらす暴風の吹き方や雨の降り方、高潮・高波発生のメカニズムなどを理解することにより効果的・効率的な防災対策が行える。また、気象庁は台風のおおよその勢力を示す目安として、第4表のように風速(10分間平均)をもとに台風の「大きさ」と「強さ」を表現している。

a 台風に伴う風の特性

一般的に台風の進行方向の右側では、台風の移動速度が加わるため、左側に比べて風が強く吹く。従って、移動速度が速い台風では、特に右側で暴風に対する警戒が必要である。

なお、実際の風の吹き方（詳細な分布）は地表面の摩擦の違いや地形の効果、周辺の気圧配置の影響も受けるため、もう少し複雑になる。また、台風が西または北側を通過するときは、時計回り（東→南→西）に風向が変化し、東または南側を通過するときは、反時計回り（東→北→西）に風向が変化する。

b 台風に伴う雨の特性

台風がもたらす雨は大量の雨が短期間（数時間から数日）のうちに広い範囲に降るため、河川が増水したり堤防が決壊したりして水害（浸水や洪水）が起こることがある。また、強い雨により山やがけが崩れたり、土石流の発生などの土砂災害も起こる。

c 高潮

台風や低気圧の中心付近では気圧が低いため、大気が海面を押し上げる力が周囲より弱くなり海面が上昇する。これを「吸い上げ効果」といい、気圧が1hPa下がると海面は1cm上昇する。

また、台風などに伴う強い風が沖から海岸に向かって吹くと、海水が海岸に吹き寄せられることにより海面が上昇する。これを「吹き寄せ効果」といい、水深が浅く風が吹いてくる方向に開いた湾では暴風による吹き寄せ効果が大きく、顕著な高潮が発生しやすくなる。

d 高波

波には、風が強いほど、長く吹き続けるほど、吹く距離が長いほど高くなるという3つの発達条件がある。台風はこの3つの条件を満たしており、例えば台風の中心付近では、10mを超える高波（有義波高）になることがある。しかも、風浪とうねりが交錯して複雑な様相の波になる。

また、うねりや台風に伴う猛烈に発達した波など、波長の長い（周期の長い）波は海岸付近で波高を増す性質がある。

(エ) 台風に関する気象情報

気象庁は、台風の実況と1日（24時間）先までの予報を3時間ごとに、それより先の5日（120時間）先までの予報を6時間ごとに発表する。

また、台風が日本に近づくと、実況は毎時間、24時間先までの予報は3時間ごと、72時間先までの暴風域に入る確率と5日先までの進路予報を6時間ごとに発表する。

第4表 台風の階級表現

強さの階級分け

階級	最大風速
強い	33m/s（64ノット）以上～44m/s（85ノット）未満
非常に強い	44m/s（85ノット）以上～54m/s（105ノット）未満
猛烈な	54m/s（105ノット）以上

大きさの階級分け

階級	風速15m/s以上の半径
大型（大きい）	500km以上～800km未満
超大型（非常に大きい）	800km以上

第5表 日降水量階級別日数

（佐世保特別地域気象観測所）

階級別日数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
100.0mm以上	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.6	0.9	0.3	0.3	0.1	0.0	0.0	2.4
70.0mm以上	0.0	0.0	0.0	0.2	0.3	1.1	1.4	0.7	0.6	0.2	0.1	0.1	4.8
50.0mm以上	0.0	0.1	0.3	0.5	0.9	1.9	2.3	1.3	0.9	0.4	0.3	0.2	9.0
30.0mm以上	0.3	0.6	1.0	1.4	2.0	3.6	3.6	3.1	2.0	1.0	1.0	0.7	20.3
10.0mm以上	2.2	2.6	4.1	4.8	4.7	7.2	6.4	5.8	4.8	2.8	2.7	2.3	50.2
1.0mm以上	8.1	8.1	9.9	8.9	8.8	12.3	11.3	10.2	9.1	6.2	7.7	7.4	108.0

0.5mm以上	10.2	9.4	11.2	10.4	9.7	13.7	12.9	11.4	10.1	6.9	8.8	9.2	123.8
0.0mm以上	20.4	17.8	18.3	15.4	15.0	19.8	19.8	17.5	17.2	13.7	15.5	19.3	209.7

統計期間：1991～2020年

第6表 日降水量及び日最大1時間降水量 第1位～第5位の記録

(佐世保特別地域気象観測所)

要素・種別	順位	降水量 (mm)	年月日	気象要因
日降水量	1位	371.8	1957. 7. 25	前線 (諫早水害)
	2位	344.4	1955. 4. 15	前線
	3位	322.5	1990. 7. 2	前線
	4位	301.5	1989. 7. 28	台風第11号
	5位	274.0	2020. 6. 25	前線
日最大1時間降水量	1位	125.1	1967. 7. 9	低気圧
	2位	104.5	2001. 6. 23	前線
	3位	102.4	1956. 8. 27	低気圧
	4位	90.0	1948. 9. 11	低気圧
	5位	87.0	2001. 9. 5	前線

統計期間：1946年11月～2023年12月

ウ 梅雨

(ア) 雨について

梅雨は、春から夏に移行する過程で、その前後の時期と比べて雨が多くなり、日照が少なくなる季節現象である。梅雨の入り・明けは、平均的に5日間程度の「移り変わり」の期間があることから、その遷移期間のおおむね中日をもって「〇〇日ごろ」と表現している。

(イ) 九州北部地方（山口県を含む）の梅雨入り・明けの平年値（1991～2020年）

梅雨入り 6月4日ごろ

梅雨明け 7月19日ごろ

(ウ) 佐世保市の6月・7月の月降水量の平年値（1991～2020年）

6月 328.9mm 7月 342.2mm

(エ) 梅雨の大雨

梅雨期の前半、前線が九州の南海上に停滞する時期は地雨性の降水が多く、前線が北上して九州北部にかかる後半には短時間の強い雨が降りやすくなる。いわゆる梅雨末期の集中豪雨である。昭和32年諫早大水害、昭和57年の長崎大水害が典型的な事例である。

昭和42年7月9日の昭和42年7月豪雨は、梅雨前線が停滞したところに台風から弱まった低気圧がこの前線上を通過したために集中的な大雨が降った。また、昭和42年7月9日に発生した「昭和42年7月豪雨」では、梅雨前線や台風から変わった低気圧の影響で大雨となっている。

梅雨末期の集中豪雨が特に災害を大きくするもう一つの要因に「直前の大雨」がある。この時期は、地面が十分に水を含み保水力が減り、地面が緩んでいることが

多い。この状態における降水は全てが地表水になって流水し、山肌や崖を崩し、土石流となる。最近では山・崖崩れ、土石流、地すべり等によるいわゆる土砂災害が自然災害のなかで大きな比重を占めている。

(3) 大災害時の気象

過去に記録した大きな災害3例と長崎大水害について概要を述べる。

ア 昭和23年9月11日夜の大水害

(ア) 災害の概要

豪雨による水害で家屋の倒壊・浸水約9,000戸、死者・行方不明者70余名

(イ) 気象概況

10日、台湾付近に発生した低気圧は東シナ海を経て、11日03時には済州島付近にあり、これより温暖前線が五島を通りさらに南東に延びる。その後、低気圧は12日03時に山陰沖に進み、南西に延びる寒冷前線が07時ごろ当地方を南下した。

(ウ) 大雨の状況

雨は10日深夜から降り始め、次第に本降りとなり11日午後に入ってから強い降りが始まった。正午ごろ西方で雷鳴を観測したが1時間程度で終わった。本格的な豪雨は18時ごろから始まり12日01時過ぎまで続いたが、この間の降水量は353mmであった。21時頃から24時にかけて激しい雷が連続し一時停電した。

日降水量(当時22時日界)は11日216mm、12日218mm、毎時降水量は第7表のとおりである。

イ 昭和30年4月15～16日の土砂災害

(ア) 災害の概要

佐世保地方空前の豪雨で被害甚大、佐世保炭鉱のボタ山崩壊により炭鉱住宅6戸住11棟が埋没、死者73名。

(イ) 気象概況

4月14日華南東部に1006hPaの低気圧があり、北北東に進み杭州湾付近から東シナ海北部に出て1000 hPaに発達し、中心から南東に延びる温暖前線が15日の昼頃当地方を北上し豪雨が発生した。16日02時には閉塞前線が通過した。

(ウ) 大雨の状況

雨は14日の夕方から降り始め夜半前からは雷を伴って強い雨が断続した。

15日午前中、1時間に72mmの激しい雨があり、16時までは182mmを記録した。

その後一時弱まったが18時過ぎから再び激しくなり、21時までは58mmを記録した。

翌16日01時から03時にかけて67mmの強い雨が観測された。

佐世保炭鉱の土砂崩れは、この後の17時に突如として発生したのである。

ウ 昭和42年7月8～9日の大水害

(ア) 災害の概要

佐世保市を襲った集中豪雨は一日の降水量232.5mmに達し、死者29名、負傷者270名、被害総額74億3千万円に及ぶ未曾有の災害をもたらした。災害救助法の適用を受けた。(西日本における被害は甚大で「昭和42年7月豪雨」と命名された。)

(イ) 気象概況

7日、東シナ海に北上した台風7号は、8日09時には弱い熱帯低気圧に変わり9日03時には女島の南海上に接近、09時に温帯低気圧となり、午前中に五島付近を通過した。その後この低気圧は九州北部に停滞していた梅雨前線を急速に東北東に

進み、10日早朝には鹿島灘に抜けた。

(ウ) 大雨の状況

8日から続いていた雨は9日07時ごろから次第に強くなり、遠雷が観測された。09時頃からは、激しい雷雨となった。11時過ぎから雨はどしゃ降りとなった。

この大雨は13時10分まで続いた。13時30分には小雨となり、西方に青空が広がりはじめ、14時50分に雨は止んだ。

11時から14時までの3時間に186mmの降水量を記録した。

エ (参考) 昭和57年7月豪雨 (長崎大水害)

(ア) 災害の概要

昭和57年7月23日から25日にかけて、長崎市など県南部を中心に記録的な豪雨となり、死者・行方不明者合わせて299名、重軽傷者805名、被害総額3千億円を上回る甚大な災害が発生した。

(イ) 気象概況

低気圧が華中方面から済州島付近へ東進してきたのに伴い、これから南東に延びる梅雨前線の活動が活発になったもので、大雨は23日の昼頃に対馬方面で始まり、しだいに南下して夕刻には平戸市付近、夜に入って長崎市付近で猛威を振るった後、24日には島原半島から熊本県方面へと移っていった。

(ウ) 大雨の状況

総降水量は600mmを越えたところもあり、また日降水量をとってみても長崎の448mm(28日)がこれまでの記録を大幅に更新するものであったが、それにもまして災害を大きくした原因は、1時間あたり100mm前後の猛烈な雨が3時間あまりも続いたことであった。

第7表 大災害時の毎時降水量

(佐世保特別地域気象観測所)

時 \ 日	S 2 3 年 9 月		S 3 0 年 4 月		S 4 2 年 7 月		S 5 7 年 7 月	
	1 1 日	1 2 日	1 5 日	1 6 日	8 日	9 日	2 3 日	2 4 日
1	5	65	7	5	—	3	0.0	4.0
2	2	1	7	19	—	1	0.0	6.5
3	1	0	3	48	—	1	0.0	2.5
4	1	—	1	5	0	2	0.0	0.0
5	0	1	2	1	1	4	0.5	0.5
6	7	1	7	0	2	2	0.5	0.0
7	8	3	3	—	24	5	0.5	0.0
8	0	7	2	—	41	10	0.5	2.5
9	0	—	1	0	8	2	0.5	2.0
10	—	—	2	0	22	10	1.5	3.0
11	1	—	39	0	14	7	0.5	—
12	1	—	59	0	0	26	0.0	—
13	3	—	21	0	0	125	1.5	0.0
14	2	—	28	1	0	35	1.0	0.0

時 日	S 2 3 年 9 月		S 3 0 年 4 月		S 4 2 年 7 月		S 5 7 年 7 月	
	1 1 日	1 2 日	1 5 日	1 6 日	8 日	9 日	2 3 日	2 4 日
15	26	—	23	1	1	0	1.0	1.5
16	2	—	12	17	0	—	1.5	1.0
17	—	—	7	13	0	—	13.5	0.0
18	1	—	5	2	1	—	44.0	3.5
19	37	—	22	5	0	—	34.5	0.0
20	62	—	17	3	0	—	36.5	—
21	46	—	19	0	0	—	14.0	—
22	9	—	3	3	0	—	35.5	—
23	46	—	2	3	2	—	1.0	—
24	88	—	7	0	3	—	12.0	—
日 降 水 量	216	218	299	126	119	233	200.5	27.0
最 大 1 時 間	90 mm		72mm		125 mm		55.5 mm	
降 水 起 日 時 間	11日23時40分		15日11時35分		9日13時10分		23日18時30分	

3 地震・津波

(1) 地震

佐世保市（佐世保特別地域気象観測所）においては、1947年の観測開始から2022年までに震度1以上が観測された地震は119回である。最大震度は震度4で、これは2005年3月20日の福岡県北西沖の地震（M7.0）によるものである。2016年4月の熊本県熊本地方の地震は、最大震度は震度3であった。

佐世保市を含む県北部は比較的地震活動が穏やかなところであるが、周辺（県外を含む）で過去にはM6～7の地震が発生しており、2016年4月の熊本県熊本地方で最大M7.3の地震が発生した。

第8表 佐世保市における震度1以上の地震の回数（1947～2022年）

震度階級	震度1	震度2	震度3	震度4	震度5弱以上
回数	86	28	4	1	0

佐世保測候所 大黒町（1947～2001年）

佐世保特別地域気象観測所 干尽町（2002～2022年）

(2) 津波

佐世保市は過去における津波の被害は少ないが、沿岸に位置するため津波について常に注意を払わなければならない。

最近では2011年3月11日、三陸沖で発生した地震（「平成23年（2011年）東北地方太平洋沖地震」）により津波を観測した。

第9表 佐世保市における津波の観測値（最大値）

地点	観測値	観測日時
佐世保（海上保安庁）	68cm	2011年3月11日21時52分

(1947年～2022年)

第2節 社会条件 【西部ガス・九州電力送配電・財務部・水道局・地域未来共創部】

1 市勢の概況

本市は、九州の北西端、長崎県の北部に位置する。市中心部から長崎市までは約80km、福岡市まで約100km、東京まで約1,000km、中国上海市まで約800kmの位置にある。

総面積は県全体の約10%にあたる426.01km²を有している。市内では烏帽子岳（568m）や将冠岳（443m）等の山系が連なり、臨海部ではリアス式海岸が形成され、各所に半島や岬が見られる。このリアス式海岸と大小の島々が織り成す複雑な自然景観は、西海国立公園「九十九島」として称賛されている。気象条件は、対馬暖流の影響を受け、年平均気温16.9度（平成26年）、年平均降水量約2,200mm（平成26年）と温暖な気候である。都市としての発展の歴史をみると、明治19年に旧海軍の鎮守府と軍港の設置が決定されてから急速に発展し、明治35年に村から一挙に市となった。以降、昭和、平成の合併を経て現在の市域となる。

人口は昭和35年の約262,000人をピークに、その後は250,000人前後で推移していたが、旧6町との合併を経て、現在は約237,000人となっている。戦後は平和産業港湾都市として、造船や炭鉱を柱にした発展を経て、現在は造船等の製造業とともに県北地域の商業・サービス業の中心都市となっている。

2 人口

令和5年1月1日現在（令和2年国勢調査を基にした推計人口）

地域別	世帯数	人口
本庁	35,803	77,913
吉井支所	1,924	4,876
世知原支所	1,123	2,831
宇久行政センター	1,025	1,751
小佐々支所	2,152	5,539
江迎支所	1,951	4,756
鹿町支所	1,612	4,142
相浦支所	12,213	27,581
中里皆瀬支所	4,589	11,635
黒島支所	195	345
大野支所	7,449	17,052
柚木支所	1,481	3,828
日宇支所	11,569	26,700
早岐支所	13,775	31,612
江上支所	3,064	7,152
針尾支所	796	2,306
三川内支所	1,405	3,547
宮支所	1,546	3,218
合計	103,672	236,784

3 交通事情

佐世保駅はJR佐世保線の終着駅であり、県北地区へは第3セクターの松浦鉄道により、長崎へはJR大村線により連結している。また、三浦地区の鯨瀬栈橋及び万津栈橋は離島

航路の発着基地になっている。

国県道による隣接地域との主要アクセスは、高規格自動車専用道・西九州自動車道、国道35号、202号、204号、205号、498号、主要地方道・佐世保嬉野、佐世保日野松浦、佐世保吉井松浦の各線、一般県道・佐世保鹿町、佐世保世知原の各線により連結している。国道35号、204号は市内を南北に貫く幹線道路であるが、地形の制約から、幅員が狭隘で朝夕の交通混雑の一因となっている。

4 ライフラインの状況

(1) 水道

令和4年度末において、水道普及率は99.8%である。

(2) 下水道

令和4年度末において、下水道普及率は60.6%である。

(3) ガス

令和4年度末において、都市ガス普及率は36.2%である。

(4) 電気

市内の電気の普及率は100%である。

5 建物の状況

本市にある建物棟数は、令和3年1月1日現在、149,471棟でこのうち木造建物は81.02%である。